岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　72

忍山城出城跡

一般県道岡山賀陽線
改良工事に伴う発掘調査

1989年3月

岡山県教育委員会

１．発掘調査後の山城

２．第３郭より北を見る

1．堀切の断面

2．完掘後の堀切

序

本報告書には，岡山市山上に所在する忍山城出城跡の調査結果を収載しました。岡山市の北部には，岡山空港が開港し，周辺道路の整備が急がれておりますが，その一つとして吉備高原都市と空港を結ぶ一般県道岡山賀陽線の道路改良工事が行なわれています。この事業に伴い，中世の山城跡の調査を実施しました。

この城跡は，岡山市上高田に所在する忍山城の出城と考えられるものであります。調査の結果，連郭式の山城で，両端部に土塁と堀切が配置されていることが明らかになりました。北側堀切は，深さ約４ｍにも及ぶ薬研堀であることが判明しました。また，郭は，地山を削って作られているものや，尾根を埋めて作り出されているものがあり，中世城郭の築城工事の一端を垣間みることができます。この報告書が，今後，文化財の保護，保存のために活用され，また，地域の歴史研究の資料として役立つものであれば幸いと思います。

最後に，発掘調査ならびに報告書の作成にあたって，岡山県文化財保護審議会委員，岡山県道路建設課，岡山地方振興局建設部等関係各位から賜りました御指導と御協力に対し，記して感謝の意を表わします。

平成元年３月27日

岡山県教育委員会
教育長　竹　内　康　夫

例　　言

1．本報告書は，県道岡山賀陽線道路改良事業に伴い岡山県教育委員会が発掘調査を実施した「忍山城出城跡（しのぶやまじょうでじろ）」の調査概要である。

2．遺跡は，岡山市山上2728ほかに所在する。

3．発掘調査は，岡山県古代吉備文化財センターが実施し，昭和62年８月３日に着手し同年10月23日に終了した。

4．発掘調査および報告書の作成にあたっては，岡山県文化財保護審議委員の鎌木義昌・近藤義郎・水内昌康の各氏より御指導・御教示を得た。

5．発掘調査および報告書の編集作成は井上弘が担当した。

6．報告書に用いる高度値は海抜高である。方位は，第２・３図は真北，第４・８・10・12図は磁北である。

7．本報告書第２図は，国土地理院発行の25000分の１（東山内）を複製したものである。

8．発掘調査にあたっては，岡山県土木部道路建設課，岡山地方振興局建設部，地元町内会等から多大なご協力を得た。記して感謝の意を表わします。

9．報告書に関する遺物・写真・実測図等は，文化財センター（岡山市西花尻1325－３）に保管している。

目　　次

第１章　調査の経緯……1
第２章　歴史的・地理的環境……3
第３章　発掘調査の概要……5
第４章　まとめ……13

図　目　次

第１図　遺跡の位置図……3
第２図　周辺遺跡分布図……4
第３図　調査前（上）調査後（下）の地形図（1／600）……折込 1
第４図　第１郭・堀切の平面図・断面図（1／300）……6
第５図　第１郭の土塁断面（1／60）……7
第６図　堀切断面図（1／60）……8
第７図　堀切断面図（1／60）……8
第８図　第２・３郭平面図・断面図（1／300）……9
第９図　第３郭の土層断面（1／60）……10
第10図　第４郭平面図・断面図（1／300）……11
第11図　出土遺物（土器，陶器，磁器1／4，古銭，鉄器1／2）……12
第12図　調査遺構全体図及び断面図（1／400）……折込 2

図 版 目 次

巻頭カラー図版１－１　発掘調査後の山城
－２　第３郭より北を見る
巻頭カラー図版２－１　堀切の断面
－２　完掘後の堀切
図版１－１　調査前の空中からの遠景（北から）
－２　調査後の空中からの遠景（南東から）
図版２－１　第１郭の全景（南西から）
－２　第１郭土塁の基部（東から）

図版３－１　第２郭の全景（北東から）
　　－２　第２郭地山の整形状態（南から）
図版４－１　第３郭の全景（北東から）
　　－２　段状に整形された第４郭（南西から）
図版５－１　城跡南端の土塁の遠望
　　－２　段状に整形された第４郭と城跡南端（北東から）
図版６－１　完掘後の堀切（後方は忍山城跡）
　　－２　堀切の断面（東から）
図版７－１　発掘前の堀切（東側）
　　－２　堀切（西側下方から見上げる）
図版８－１　堀切の土層断面
　　－２　出土遺物

第1章　調査の経緯

第1節　調査に至る経過と調査体制

新岡山空港の開発に伴い，周辺の道路の整備が重要となった。その一つに吉備高原都市と新空港を結ぶ路線として一般県道岡山賀陽線（吉備新線）が計画された。この計画路線内に忍山城跡とその出城跡が所在していた。忍山城跡は，その中腹をトンネルで通過するため問題はなかったが，同出城跡は，そのほとんどが路線にかかることとなり，昭和61年5月22日付けで岡山振興局長より文化財保護法第57条に基づき，岡山県教育委員会あて協議文書が提出された。そこで関係機関による協議の結果，この城跡について，(1)，工事着手前に詳細な地形測量を実施する。(2)，1ののちに発掘調査を実施する。(3)，発掘調査の結果，重要な遺構等が発見された場合は別途協議することとなった。この協議結果に基づき，教育委員会は昭和62年度に発掘調査を実施することとした。発掘調査は，昭和62年8月に着手したが，それに先行して航空測量による城跡の100分の1の地形図（第4図）を作成した。

調査は，岡山県古代吉備文化財センターが実施した。調査期間は，昭和62年8月3日から同年10月23日までである。

調査にあたっては，岡山県文化財保護審議会委員の指導，助言を得た。また，岡山県土木部道路建設課，岡山地方振興局建設部をはじめ，地元町内会長，地権者等各位から多大な御協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。

調 査 体 制

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	橋本泰夫	
総務課長	佐々木清	
調査第一課長	河本　清	
文化財保護主査（第一係長）	井上　弘	（調査担当）
主　　任	花本静夫	（事務担当）

第2節　日　誌　抄

8月3日　発掘資材の搬入　トレンチの設定と掘り下げ

4～6日　北端から発掘　腐葉土の掘り下げ

10～12日　第1郭黄色土の検出

17～19日　第1郭遺構の検出作業

24～28日　第2郭表土の除去　遺構の検出作業

9月1～5日　第3郭表土の除去　遺構の検出作業

9月8～10日　第1郭清掃　写真撮影　土塁の実測

16～18日　第1郭北側　堀切の掘り下げ土塁周辺の地形測量

21日　堀切の掘り下げ

25～30日　第3郭南端の掘り下げ　堀切の掘り下げ　断面実測　地形測量

10月1～3日　堀切の掘り下げ　A－5・6区の測量

10月5～9日　堀切の掘り下げ　A－8・6区郭の清掃　写真撮影

12～14日　第1郭土塁の断面実測　A－9区測量　写真撮影

19・20日　A－1～3区（南端）地山面の検出と地形測量　A－3区3段に構成された郭の検出　A－4区トレンチの設定と掘り下げ

21日　A－3区郭の地形測量　写真撮影
発掘資材の清掃，資材の撤収

10月22・23日　A－3区地形測量

発掘作業員

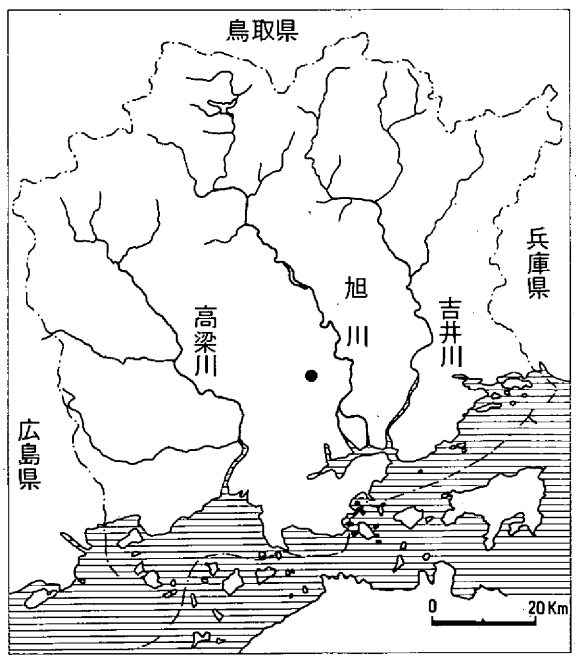
金木鹿造　安藤正　田野口信夫　林正　野上肇　時国忠浩　林秀郎　高屋武志　元成常男　林奈津子　山本道子　片山隼子　宗景満　人見典子　金木常美　西田八重子　元成美紀子

第２章　歴史的・地理的環境

忍山城出城跡は，岡山市の北部，日応寺の北西に位置し，御津町境に近い所に在る。付近は，岡山県の中央部にある吉備高原の南端部に位置するもので，遺跡の最高値は，標高246ｍを測る。付近は，標高200ｍ～300ｍの丘陵が連なり，日近，足守付近で急に高さを減じて岡山平野となる。城跡の西には，日近川が流れており，流域に沿っては細長く平地が見られる。日近川も，勝尾峠を分水嶺とし，南に流れて足守で大井川に合流する。城跡も，日近川に向く斜面は急崖をなしており，天然の要害となっている。

岡山市山上，上高田周辺は，現在知られている遺跡の分布密度は低い。城跡周辺では，第２図２～７は，祭祀址とされるもので，点在している。径５～10ｍの円丘が見られるものであり，その性格はまだ充分判明しているとは言えない。９～12は，方形もしくは，円形の台状を呈し高さ１～２ｍ，径10～20ｍを測る古墳で，前半期のものと推測されるものである。また24～32も古墳で径10～15ｍ，高さ約１ｍを測る墳丘をもつもので，古墳時代の前半期と推測されるものである。

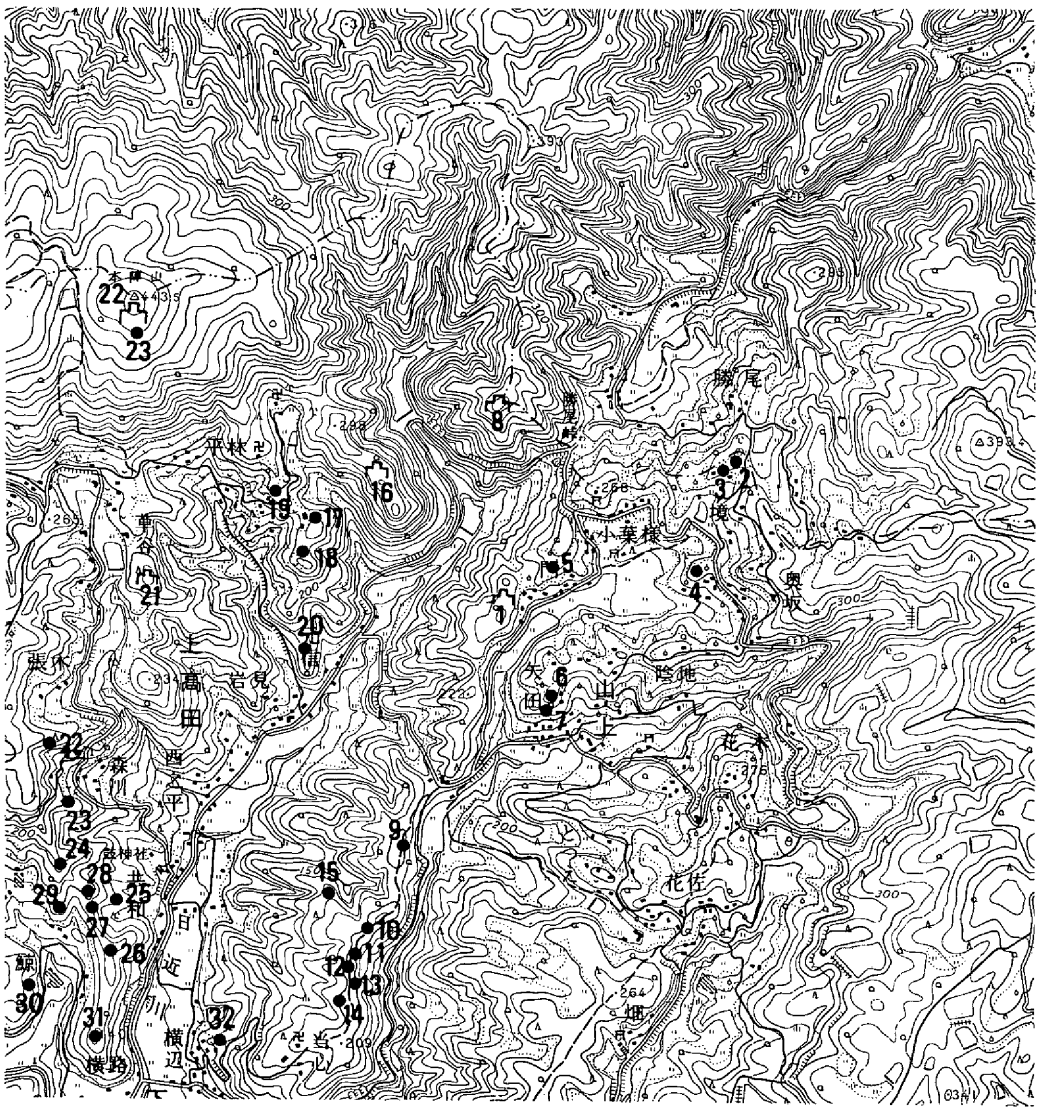
８，16，21，22は，中世の山城であり，隣接して多くの城跡が所在する。城跡は，いずれも丘陵の高所に立地し，急崖の上に位置している。忍山城跡は細長い連郭式の山城で，尾根を堀切で切断しながら郭を構成するもので，全長約500ｍを測る。三方は急崖であり，難攻不落の城である。８は，信倉山城跡である。中央の郭とそれをめぐる帯郭が見られ，北側，東側は，竪堀，堀切，横堀が作られている。特に東側には二重の横堀が構築されている。南側，西側は急崖となっている。



第１図　遺跡の位置図

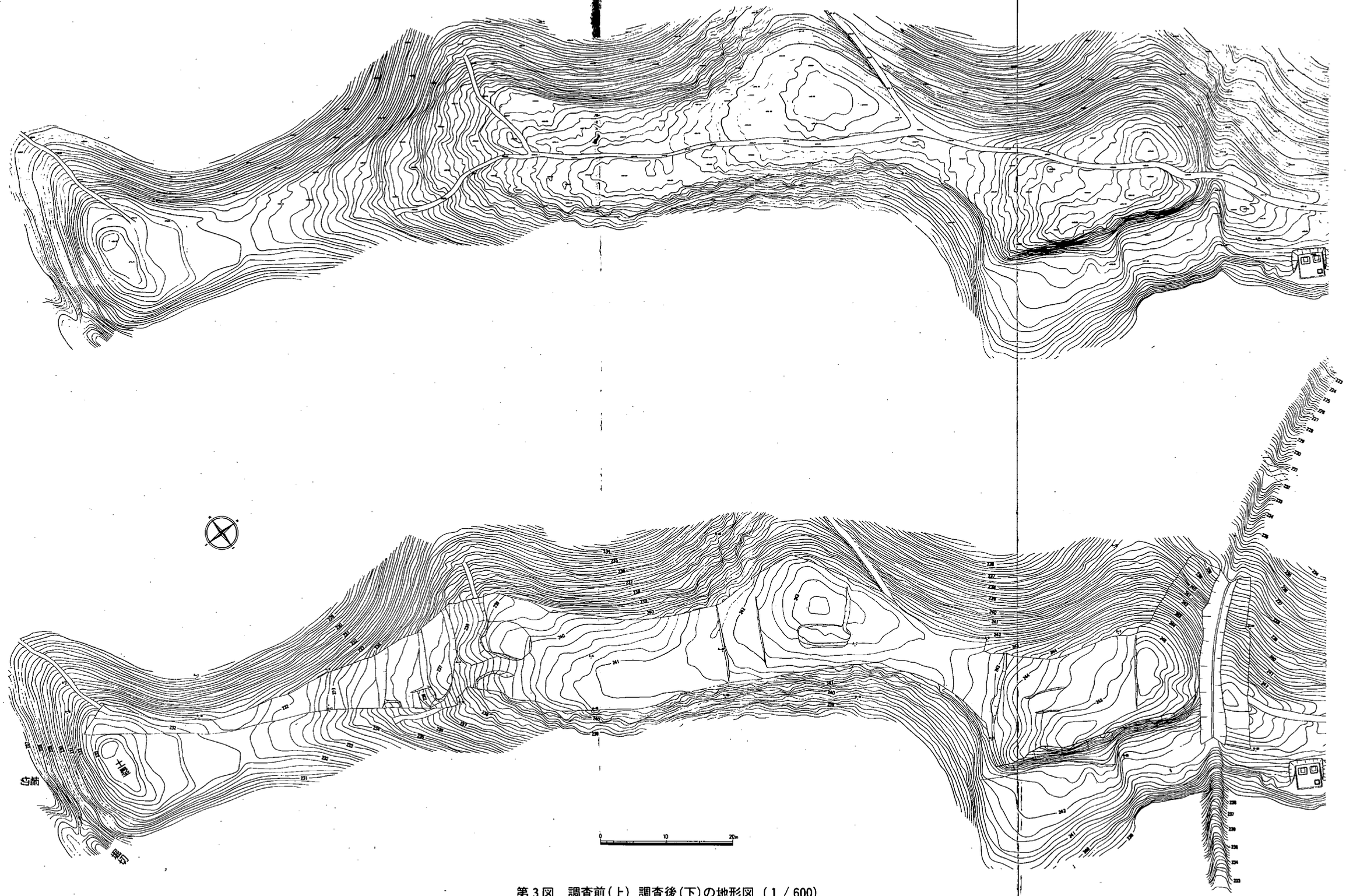
参考文献

『岡山市埋蔵文化財分布地図』岡山市教育委員会　　1983年３月



第２図　周辺遺跡分布図（１／25,000）

１．城　跡
２．祭祀址
３．祭祀址
４．祭祀址
５．祭祀址
６．祭祀址
７．祭祀址
８．信倉山城跡
９．古　墳
10．
11．古　墳
12．古　墳
13．墳丘墓
14．散布地
15．
16．忍山城跡
17．祭祀址
18．
19．祭祀址
20．祭祀址（墓址　）
21．城　跡
22．本陣山城跡
23．祭祀址
24．古　墳
25．古　墳
26．古　墳
27．古　墳
28．古　墳
29．古　墳
30．古　墳
31．奥ノ谷古墳
32．古　墳



第3図　調査前(上) 調査後(下)の地形図 (1 / 600)

第３章　発掘調査の概要

忍山城出城跡であるこの城跡は，ほぼ南北に伸びる丘陵上に所在する。細尾根上に立地する城跡は，西側は急崖を成している。発掘調査前の踏査では北端に堀切があり，南端に土塁がある連郭式の山城で，全長約180ｍと推定されていた。

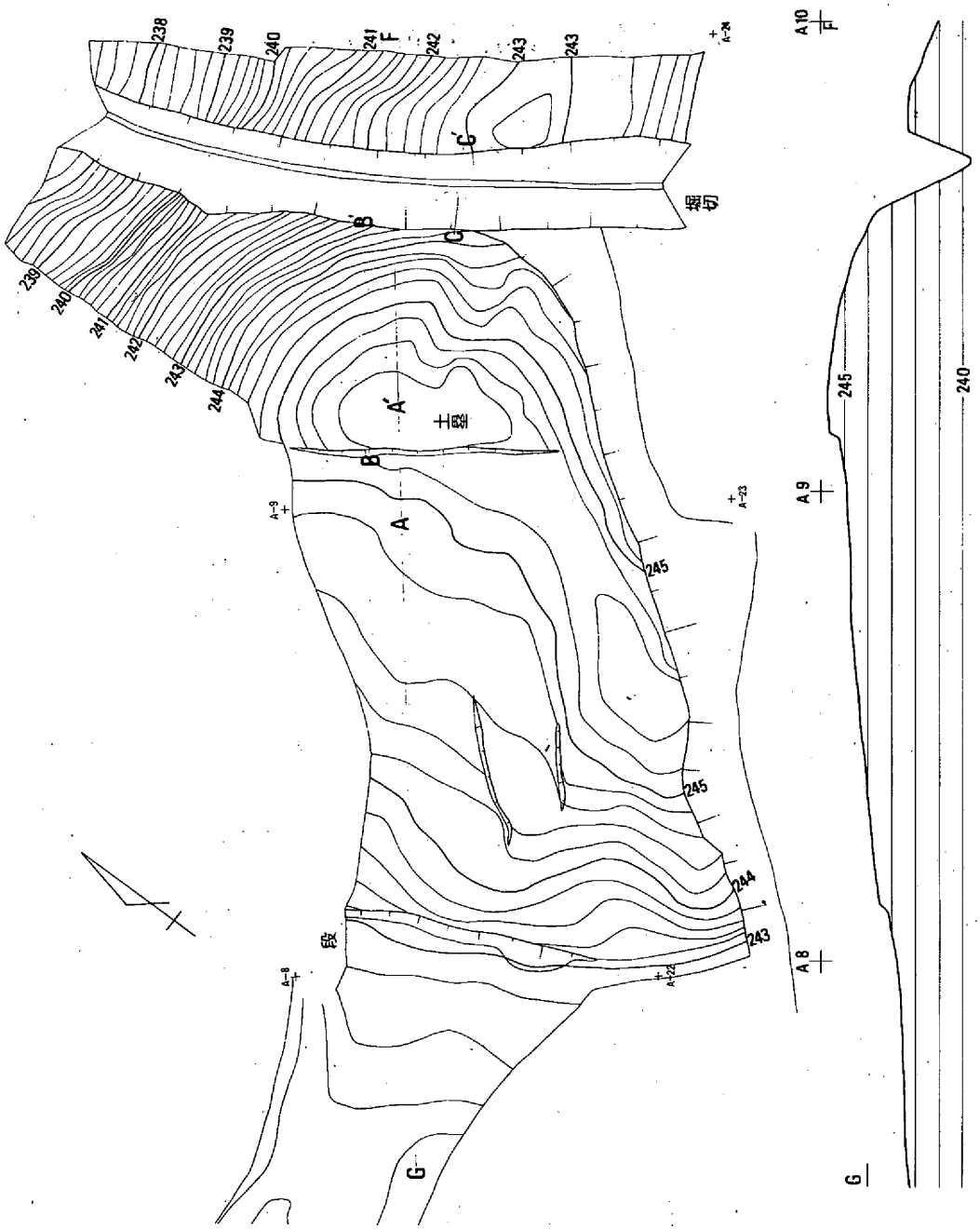
発掘調査の結果，各々の郭は表面に腐葉土が堆積するのみで，５～10cmの腐葉土を除去すれば，淡黄色の自然層となる。調査した遺構について北から第１郭，第２郭とし概要を述べる。

第１郭　南北に長い長方形を呈するもので，西側は自然地形の急崖が見られる。東側は，人工的に削られた垂直の崖面を見せている。北側には土塁を築き，その北側に堀切がある。郭内の平坦面は，東西約13ｍ，南北19.5ｍを測る。郭の内部は，ほぼ平坦であるが，南西方向に少し下り，Ａ－８杭近くで大きく段をもつものである。土塁は，北側には明瞭であるが，東側にもわずかな高まりが見られ，存在していた可能性は高い。北側土塁の郭内側部分は，自然層を掘り下げて段を造りその上に土を盛って土塁としたものと考えられる。第５図に示すものがその断面である。同上図のものは７層の自然層を掘り込んで土塁の基礎を造るものである。下図は５層が自然層であり，４層は築城時の表土と考えられる層である。２・３層が土塁の盛土で，黄褐色粘質土と淡赤褐色粘質土が盛られている状況が見られる。盛土は比較的簡易に盛られている。

堀切　第一郭土塁の基底部より北へ9.3ｍの位置にある。最頂部での断面を見ると，堀切の幅3.42ｍ，深さ4.02ｍを測る。底面には，幅24cmで平坦面を造る。ほぼＶ字形に掘り込まれた堀切で薬研堀の形状を呈するものと言える。この堀切は，現地踏査の時点では50～60cm窪むものであった。この堀切がほとんど埋没していたのは，南側土塁の盛土が流入したものと考えられる。

竪堀，堀切からさらに下方に向けて斜面に掘られたもので，西北へ36ｍ，東へ22ｍまでを確認した。東側については，地元の人によるとさらに下方へ続いていたが，現在は畑等に開墾することにより，消滅している。竪堀について北西側にトレンチにより，その断面を観察した。第７図は，堀切から下方へ約９ｍの位置の図面である。５層は自然層のナメラで，４層は築城時の地表土と考えられる層である。３層は，堀を掘った時の土である。そのため，竪堀の両側は低い土塁状の盛土が続く。堀の断面形はＶ字形を呈しており，現状で深さ190cm，幅210cmを測る。

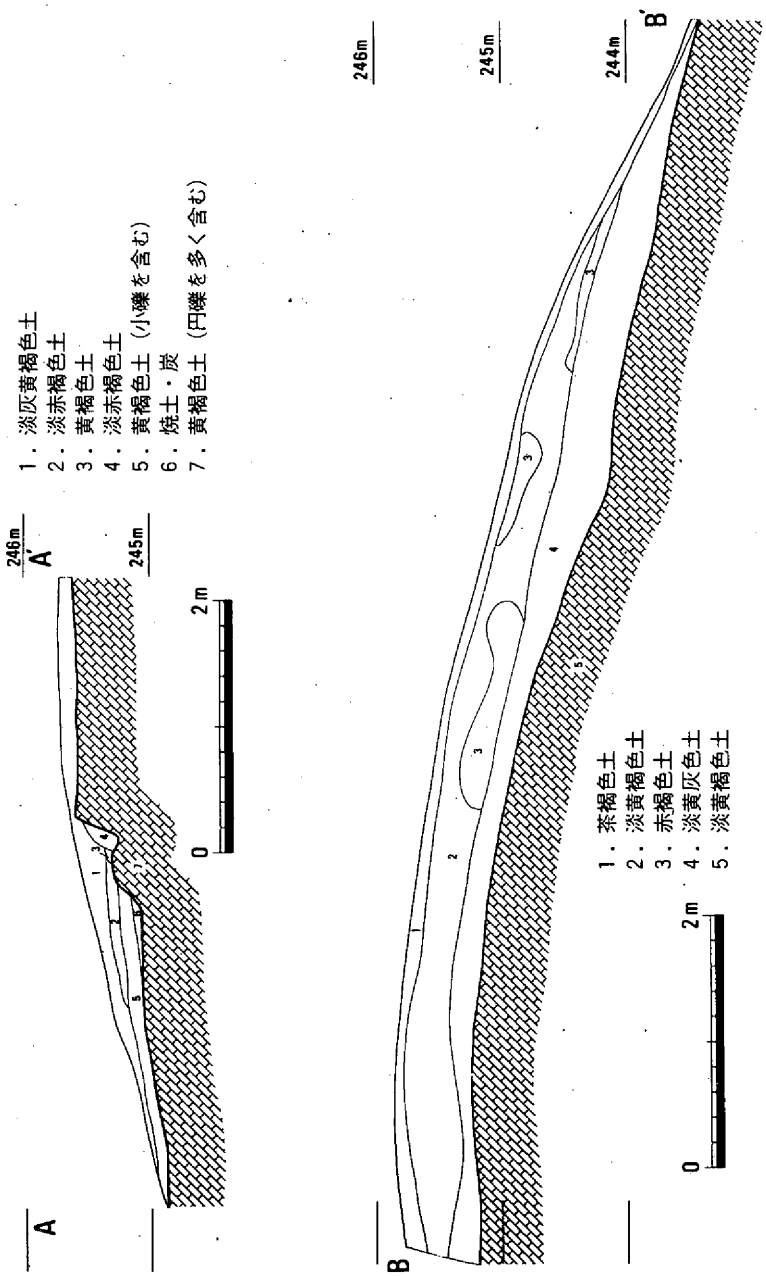
今回の調査において用地外であるため発掘できなかったが，第１郭の東側に小規模ながら平坦面が見られる。この部分も本城跡の郭と考えられる。



第4図　第1郭・堀切の平面図・断面図（1／300）

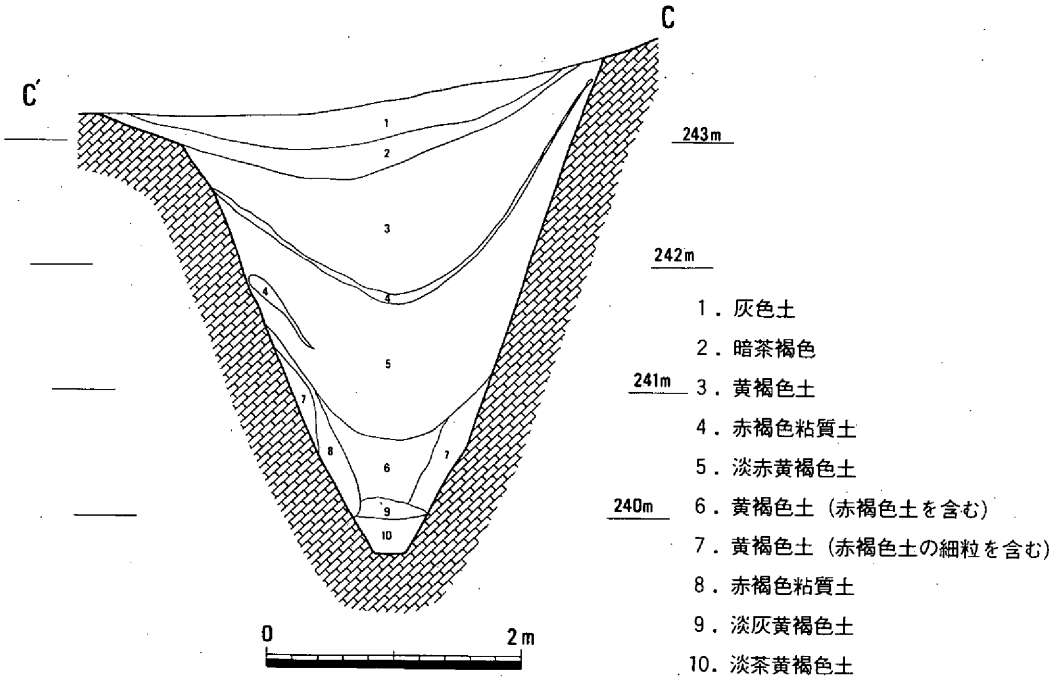
第2郭　第1郭の南西約24mの位置にある。平面的には，将棋の駒形を呈するものである。城跡全体からすれば，ほぼ中央であり，全体を見わたせる位置にあるとすることができる。地形的には，A－7杭から約6m南西付近が高く両側へ下る。A－7杭のグリッド線付近で段が

つく。南側は，A－7杭から約14mで段が見られる。その間約13mが地山を切り出して壇を形作っている。現状ではこの間はゆるやかな斜面を見せるが，築造時には，盛土等で上面を平坦に造っていたものと考えられる。南側の削出しの段は，現状では約30cmの高さを測る。南側の段の南約6mの位置に，まったく平行して同様の段が見られる。地山を削り出すものであり，全長12m，高さ30～40cmで残存していた。この巾約6mの間は非常に平坦で，郭の平坦面を横切っている。第2郭は，自然層を削り出す遺構が存在していた。

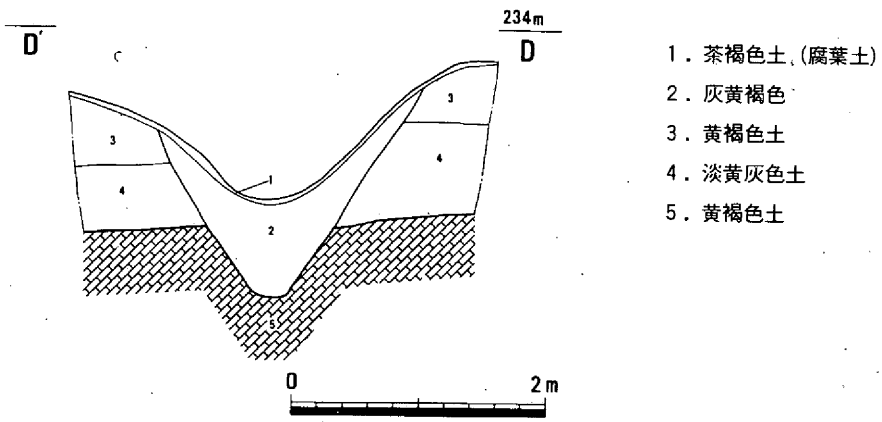


第5図　第1郭の土塁断面（1／60）

第3郭　第2郭に連続して形成されるもので，長方形を呈する。長軸の方向は北東から南西を向くもので，幅12m，長さ30mを測る。ほぼ平坦であるが，西に向けて少し下る。この郭は面積的には城跡の中では最も大きい。この郭は，等高線で241mの線から高い部分は自然層が露出しているが，それより低い部分は堆積土である。その状況をA－5杭から西に向けて設定したトレンチで見ると，6

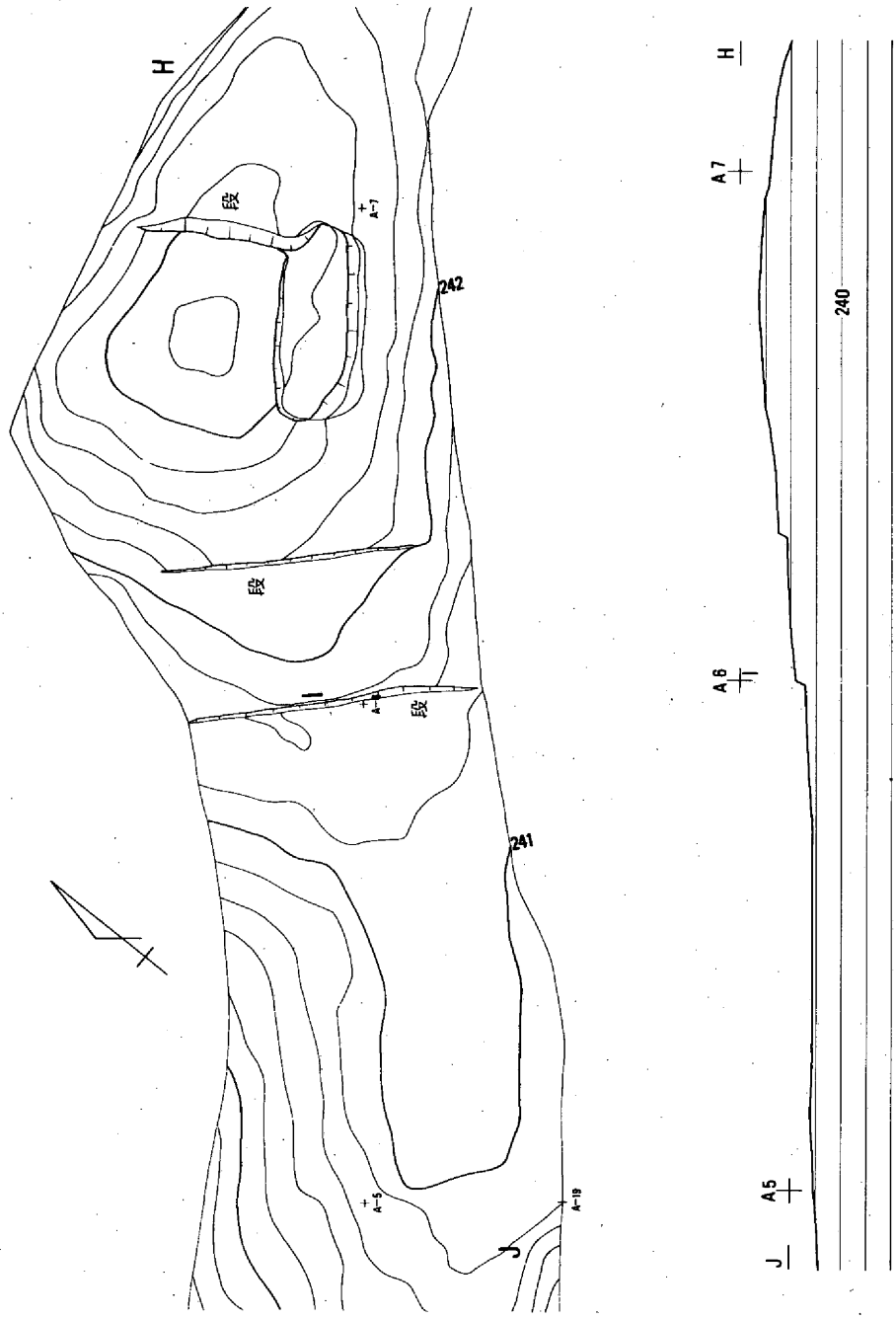


第６図　堀切断面図（１／60）



第７図　堀切断面図（１／60）

層は自然層であり，東へ高まってゆく。５層は築城時の表土層である。２・３層は盛土と考えられるもので，特に３層中には薄く間層が見られる。これらの土は丘陵の頂部の地山土を削って西側に埋め出した状況を見せている。地形的に西側へ下るのは，盛土であった土が固く締ったために地盤が沈んだものと考えられる。そのため，築城時には全体は，現状以上に平坦面を

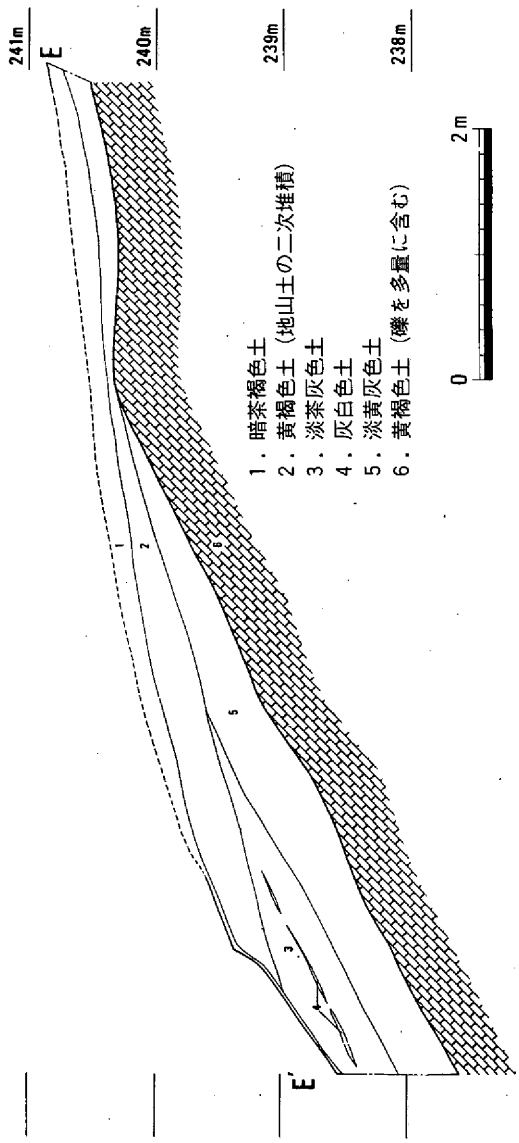


第8図　第2・3郭平面図・断面図（1／300）

呈していたものと推測される。

第4郭　第3郭の南端がやや急な斜面をなしており，現地踏査においても段状のものを確認していた。調査前においては畑の可能性も考えたが，耕土と考えられる土はなく，城跡の一部と推測される。同所は，第3郭の南端に一部自然の斜面を残し，下方をほぼ垂直に切り落し断

面でL字状の平坦面を3面形成するものである。上段・中段の平坦面は山よりは自然層が露出するが端部側は，地山土の盛土により整形されている。上段の平坦面幅12m，奥行4mを測る。中段は，北東部を，角に整形し，長方形の平坦面を形成している。平坦面の規模は，幅8m，奥行5mを測る。中段の平坦面の東側は，自然の斜面を成しており，通路としての要素が強いものと推測される。この通路の方向の北側は，第3郭と第4郭の接点に幅2mで斜面の整形された部分へつながることになり，斜面部に設けられた城内の道路の可能性がある。下段は，用地巾の関係もあって全体を検出することができなかったが，幅10mまでを調査した。幅については，西側は端部まで調査したが，東側に関しては，まだ拡がるものと考えられる。平坦部は，少し下りながら南に延びるが等高線で233m付近で少し斜面が変わるため，ここを一応の区切とすれば，奥行約9mを測る。

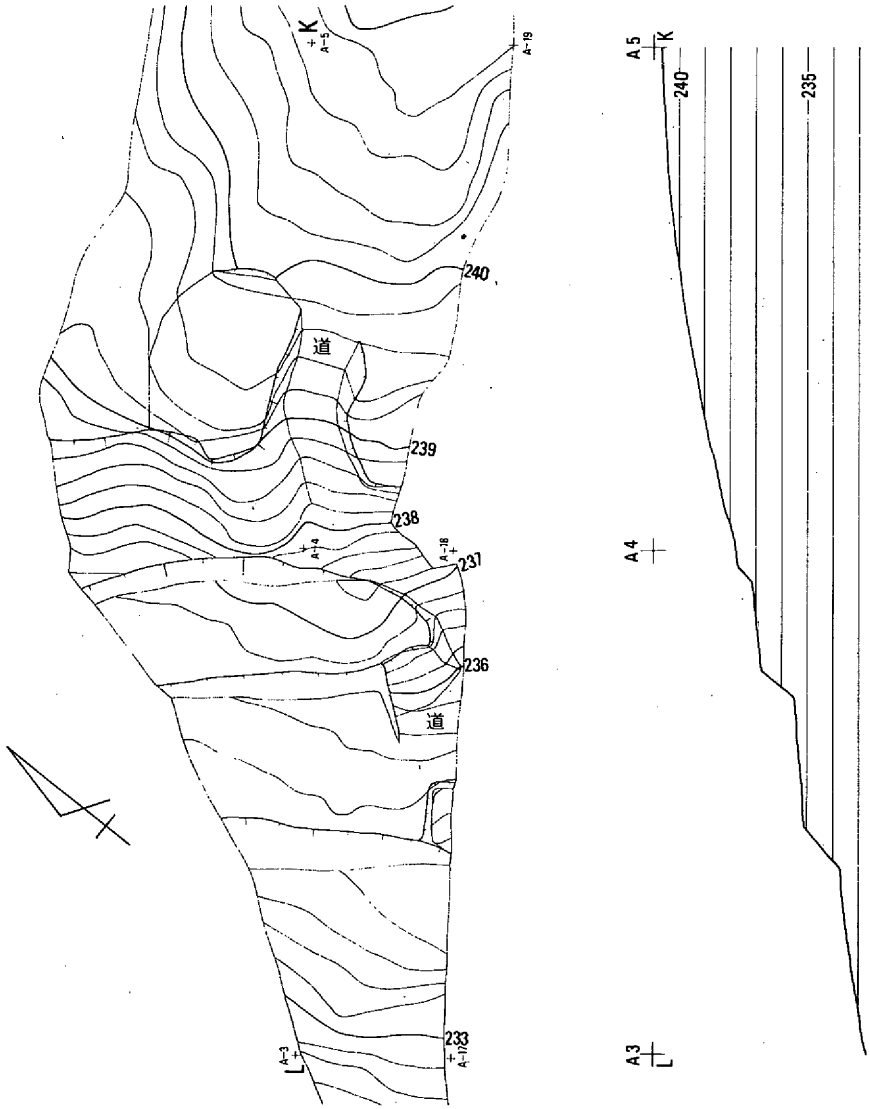


第9図　第3郭の土層断面（1／60）

土塁　現地踏査において明瞭に確認できたものである。残存する土塁は用地外にあるため調査しなかったが，現状で約60cmの高さで残っている。基底部の幅は約5mを測る。この土塁の南側は急斜面をなしている。土塁の北側には，幅12m，奥行8m程度の平坦面が認められる。土塁の南側には，丘陵を切断する堀切が見られる。堀切は，尾根を切断するように掘られており，尾根の頂部からすれば，西南西方向と東南東方向に向けて掘られるもので約20mまで確認できる。尾根の頂上部は掘開されずに土橋が見られる。

出土遺物

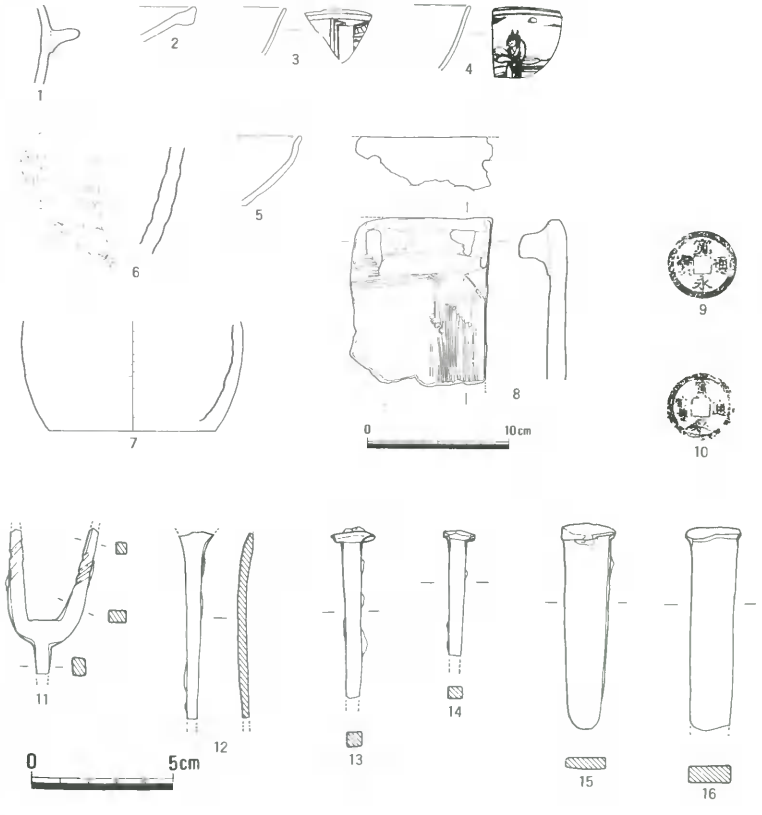
出土した遺物は，小破片のものが多くまた量も少ない。実測しえたのは図示した16点である。1は，土釜の片破である。小片であるため法量は不明である。出土



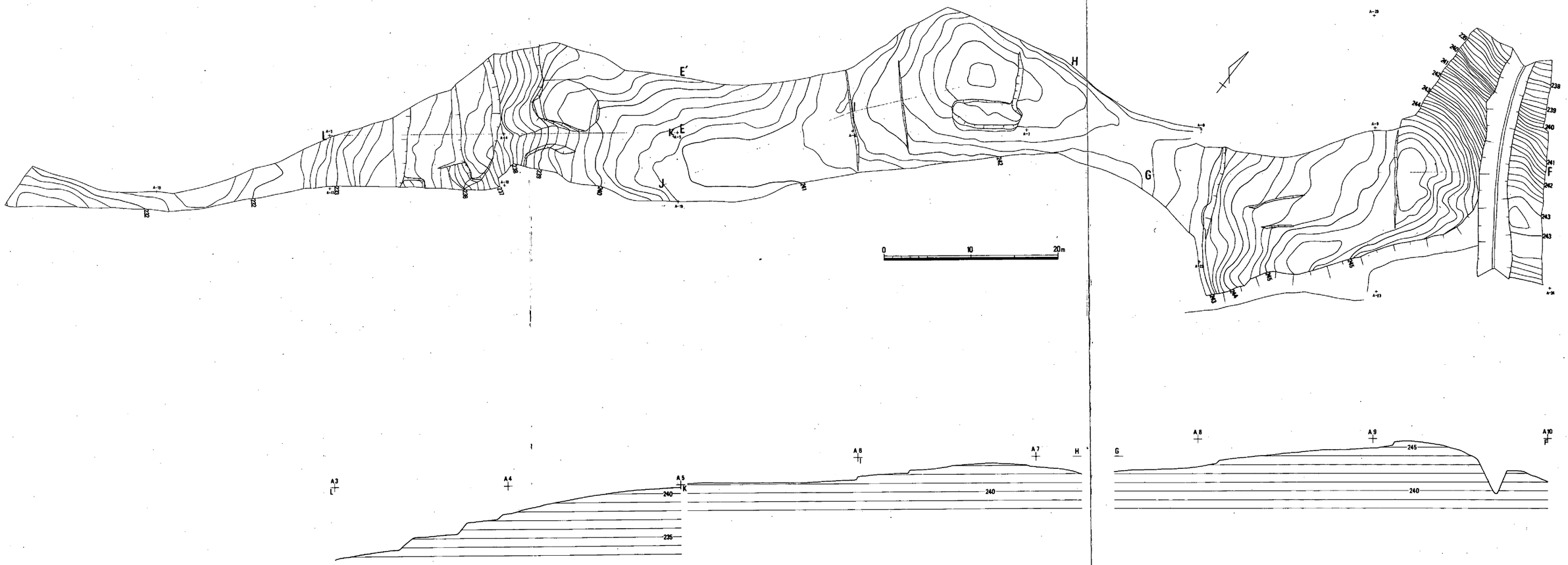
第10図　第４郭平面図・断面図（１／300）

したのは胴部に鐔を貼付けた部分であり，全体に淡黄褐色を呈しており煤の付着は見られない。２は青磁の小片である。３，４は染付碗の破片で，同一個体の可能性が強い。文様は，白色の器体に濃い青色で描かれており，４は人物が描かれている。５は淡黄褐色の釉薬が施された天目碗で，瀬戸系の可能性がある。６は備前焼擂鉢で，体部は凹凸が見られる。内面の櫛目は一定方向ではなく，部分的に交さする。７は備前焼壷の破片で，底部の推定径は11.7cmを測る。内面には凹凸が見られる。８は使途不明の遺物で，平らな土板に凸帯を貼付するもので，凸帯には円孔が見られる。９，10は寛永通寶で，近世墓より出土した。古銭は５枚出土しており布袋に入れられていたもので，布の小片が出土している。伴出遺物としては，銅製の煙管片が出

土している。11～16は鉄製品である。11は，雁股の鉄鏃で，先端部を欠失している。鉄鏃の断面は方形で，身の中頃は左廻りに捩られている。12は，先端が少し開く細身の鉄鏃と考えられるものである。端部を少し欠くものであるが，ほとんど元来の姿に近いものと思われる。13、14は，鉄釘である。13は一辺５㎜の角釘である。残存長は６㎝を測る。14は一辺４㎜の角釘で残存長4.5㎝を測る。15，16は，楔である。15は完存するもので，一度は使用されたもので，頭部に敲打痕が見られる。16は，端部を少し欠くものであるが，ほとんど残存している。これも頭部に敲打痕が認められる。



第11図　出土遺物（土器・陶器・磁器1/4、古銭・鉄器1/2）



第12図　調査遺構全体図及び断面図（1 / 400）

第4章　ま　と　め

城跡からの出土遺物のうち，第11図6，7は備前焼である。8は擂鉢の胴部破片であるが，器壁は，内面，外面ともに凹凸が激しい。内面には5本単位の櫛目が見られる。櫛目は交差する部分も見られる。色調は明茶紫色で，堅緻な焼成である。口縁部が見られないため厳密な比較はできないものの，不老山西口窯跡出土[註1]のものに似ており，ほぼその時期のものとされるであろう。7もほぼ同時期の遺物と考えられ，戦国時代末頃と推定される。1～5も時代的に矛盾はないと考えられ，城跡に関係する遺物とされるであろう。出土遺物に四角な鉄釘が出土していることは，同所にも建築物のあったことを窺わせるが，検出遺構，出土遺物の量などからして長期間使用したものではなく，臨時に使用された城と推測される。

この城跡の周辺には中世の山城跡が知られているが，『中国兵乱記[註2]』によると，信倉山，鎌倉山，茶磨山砦，忍山城が知られる。忍山城については第2図16がそれにあたることは衆目の一致するところである。信倉山であるが，これは，忍山の北東に在る山を地元では延倉山，信倉山と呼んでおりそれに相当する（第2図8）と考えられる。しかし，永山[註3]は，鎌倉山と同一視しているが，『中国兵乱記』では異なるものと記しており，各々独立したものと考えるべきであろう。鎌倉山であるが，地元の人[註4]の案内で現地を見たが，城跡北端に土塁らしきものが見られるのみである。丘陵の頂部は，郭をなすような平坦面が見られ，周囲は急斜面となっている。そのためか，堀切は見られない。城跡とするには決定的な資料に欠けるが，鎌倉山と呼ばれていることは確かであり，一応この山を考えておきたい。鎌倉山の位置は，信倉山の北約1kmに在る。茶磨山砦であるが，『中国兵乱記[註2]』の記述からすれば，現在の岡山市上高田，山上付近に求められるものと考えられる。加原は，山上の城山[註5]と呼ばれる山をそれに充てており，今回調査した山を呼ぶものである。具体的な所在地が明記してない以上，場所を証明することはできないが，可能性は高い。また，砦とすることは，その構築が城より簡単であることを推測させるものであり，今回調査した遺跡が，山城としての機能は持つものの単純な作りであることを考えれば砦としての可能性も考慮の必要性を感じる。

註

註1　葛原克人「不老山西口古備前窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1　岡山県教育委員会　昭和47年3月

註2　加原耕作編著『新釈備中兵乱記』130，131頁，山陽新聞社　昭和62年10年

註3　永山卯三郎『吉備郡史』中巻，1660頁，名著出版　昭和46年9月

註4　地元の野上肇氏の案内による。

註5　加原耕作氏および地元の田野口信夫氏の御教示による。

図版 1

1．調査前の空中からの遠景（北から）

2．調査後の空中からの遠景（南東から）

図版 2

1．第１郭の全景（南西から）

2．第１郭土塁の基部（東から）

1．第２郭の全景（北東から）

2．第２郭地山の整形状態（南から）

図版 4

1．第 3 郭の全景（北東から）

2．段状に整形された第 4 郭（南西から）

1．城跡南端の土塁の遠望

2．段状に整形された第4郭と城跡南端（北東から）

図版 6

1．完掘後の堀切（後方は忍山城跡）

2．堀切の断面（東から）

1．発掘前の堀切（東側）

2．堀切（西側下方から見上げる）

図版 8

1．堀切の土層断面

2．出 土 遺 物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　72

忍山城出城跡

平成元年３月15日　印刷
平成元年３月27日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
発　行　岡山県教育委員会
印　刷　柳本印刷株式会社